波ゆるる

――授賞作品概要

美馬　翔

まだ街路樹も育っていないのだろうか、木陰もない夏の新興住宅地を、主人公の康子は保険の勧誘に回っている。

間髪いれず拒絶されながらも、昼在宅、幼児がいる、などと情報を記録する。康子はベテラン保険外交員だ。

康子には高校三年生になる拓哉という息子がいる。大学には絶対に行かせたい、経済的にも国公立ならなんとかなる、そのために学資保険もかけて、シングルマザーの康子は頑張っている。いい大学に入り、楽な暮らしを手に入れて幸せになってほしい、康子の願いだった。

しかし最近、拓哉の足が神経質に揺れる。頻繁な咳払い。康子が見つめると目を逸らす。笑わず無口になった。

ベランダに洗濯物を干すために拓哉の部屋に入り、机の上のノートをたまたま見てしまう。鉛筆で何度もなぞり書きされた濃い太い字。紙が破れるほどに筆圧が強く、真っ黒な、まるでアリの群れが張り付いたかのように書かれていた。拓哉は大学受験のために予備校の夏期講習に通っていた。休まず、別に不審な様子はない。風呂好きで潔癖、一日着た物は全部着替えて洗濯機に放り込んでいたのに、最近では風呂にも入らず着替えもしない。このまま何事もなく夏休みを乗り切って、国立大学とまではいかなくても、せめて公立大学には進学して欲しい。無理な望みでもない、十分に目指せる成績のはずだった。

新学期が始まった。拓哉は朝起きづらいようだった。一時間目に間に合わず、二時間目からと、日々登校が遅くなっている気がした。気にはなったが、保険の大売り出しである記念月で、康子は忙しい。ノルマを課せられているが、まだ五百万の小口年金保険しか成約していない。追い詰められていた。

拓哉の妙に長く感じられる指先が、皿の縁をたたいている。話しかけるが拓哉は反応しない。生きているように感じられるのは、痙攣する細い指だけだった。

朝八時、会社に電話する。内勤の職員に休むと告げると、あからさまに不機嫌な声で返された。

やっと起こした拓哉はパジャマを脱ぎ捨て、パンツ一枚になる。服を着るのにもどたばたと、ちぐはぐな動きを繰り返す。てこずっているのを康子が手を添える。なぜこんなことに。何も知らないで、受験の成功だけに関心を向けていた。拓哉が疲れ果てるまで頑張れ、頑張れと鞭打っていたのではないのか。

精神の不調だ。早く病院に連れていかなければならない、担任に電話をかけた。

担任は手紙を差し上げたと言う。忙しさにかまけて読んでいなかった。担任の空き時間に会う約束を取り付ける。

担任は拓哉の提出したノートを見せた。康子は見て驚いた。真っ黒な字で、びっしりと書いてある。念のために精神科に行って欲しいと言う。

翌朝、病院に行く。診察室に入った拓哉は、三分も経たないうちに診察を終えた。康子は先生に言われた。

「精神科の治療というのは、本人が大丈夫と言えば、無理に治療することはできないのです」

翌日は駅ビルにあるクリニックに行った。一時間半待って診察は十五分ほどで、次に康子が呼び入れられた。拓哉の様子を質問してくる。

「強迫症状がありますが、鬱も出ています。薬をお出ししますから二週間して、もう一度来てください」

実際の治療はこれからなのだが、専門家に委ねられたことで安堵する。

帰宅してから、支部長の桜井に電話した。病名を知り、

「心の病気は必ず直るからじっくり世話したげ。会社には私から言っておく」

日頃は厳しい人だが、情のこもった口調であった。女手一つで三人の息子さんを育て上げた人なのだ。

一ケ月を越すと薬のおかげだろうか、次第に拓哉の身体のこわばりが解けはじめ、表情も姿態も柔らかくなった。

担任は拓哉の登校を喜んでくれたが、ノートも取らずぼーとしていると言った。

拓哉が休んでいる間、高崎と水田、永久は自主的にプリントを預かってくれていた。相談の結果、高崎にだけ事情を話して、拓哉の様子を見守ってもらうことになった。病気になっても友人が支えてくれる。康子は不意にこらえきれずに泣き崩れた。帰り道で心配が膨れ上がった。拓哉は大学受験どころか卒業さえ危なくなっていた。

夜、高崎に拓哉を頼む電話をする。高崎は当惑して、先生にもそんなこと言われた、はっきり言って関わりたくない。俺が一番だと思っていたのに、拓哉が変になってラッキーだった。俺ってそんな奴、拓哉の面倒なんて見ていられない、と言われた。誰もが弱い者を蹴落として生きていかねばならない。康子だってそうして生きてきたし、拓哉にも強く勝ち続けて欲しいと願ってきた。

改めて世間の冷たさが分かったわけではないが、耐え切れなくなって発泡酒を飲む。一缶、二缶、またたく間に飲み干す。愛用の白磁のビールグラスを指先でくるくる転がす。このグラスも大切にしている皿も、あるブランドの製品だ。陶器や生活雑貨やアクセサリーを通じて、生活への提案を幅広く展開しているブランドだ。ここのデザイナーに彼の名前を見つけたとき康子は驚き、内心誇らしく思った。お金に余裕ができた時に、密かに買い集めてきた。

拓哉の父である彼を思い出す。売れっ子デザイナーになったのだ。
その人しか我を忘れるほどひきつけられることなどなかったのだ。
「君は才能があるよ、色彩の使い方がきれいだね」
彼はさりげなく、インパクトの無い康子のデザインを直してくれた。的確に仕事をこなしていく彼は、頼りになる存在だった。彼には妻がいた。自分が馬鹿になっていくようだと思いながら彼に傾いていき、全てを注ぎ込んだ。
妊娠が分かり体調が悪くなったのを機に、康子は親元に帰ることにした。最後の日、彼はあまり話さず、「連絡するから」と言った。私のことなど忘れて家庭に戻り、遊びだったという顛末に落ち着くのではないか。あの頃の康子は、子どもを一人で育てることを決心し、それに少し酔っていたのかも知れない。
デザイン事務所を辞めて故郷で子供を産んだ。彼に告げれば時限爆弾のような子供など望みはしなかったはずだ。拓哉はあの憑かれたような日々の形見である。
康子は仕事に復帰したいと考えて、桜井に相談した。しかし、結果は会社を辞める事になった。
学校に進路相談をお願いしてみた。十二月では遅いぐらいである。進路指導の先生と担任、拓哉を含めて四者で向かい合う。一般入試なら今からでも願書が出せる。
「私立に絞られたらどうでしょうか」
康子がかろうじて名前を知っている程度の大学名が、プリントに刷られている。不本意だったかもしれないが、拓哉は私立大学を目指すことになった。
年が明けると拓哉は沈静した。散らばったパズルのピースが寄り集まってきて、元の人格に戻る。拓哉は受験勉強を再開した。康子は拓哉に賢い人間になってもらいたかった。抽象的な願いではなく、医師や弁護士、社会的地位の高い人間になって、故郷の両親に誇れるような人になってもらいたかった。父である人に会って、これがあなたの息子よ、私が一人で育てたのよと言いたかった。
家事が面倒になってきて、一日中パジャマ姿で髪を振り乱していた。人の心はゼリーのようにもろいものだ。内部から崩れてくる。料理用に置いてある酒を飲み始めた。酒が切れて自動販売機へ買いに行く時だけは、階段を駆け下りることができた。
「勉強しなさい、親不孝者。大学へ行け。どれだけ苦労して大きくしたと思っているの、あんたが偉くならないと、私が馬鹿にされるの。私の人生は失敗よ、あんたのせいで保険の小母ちゃんにしかなれなかったんだから」
言ってはならないし、言うことを恥としてきた言葉がかってに漏れ出す。持っていた傘で蒲団の上から拓哉を叩く。傘の柄が曲がり、骨が細い棒状になって飛び散る。拓哉が怒鳴り返した。
「酔っ払い、アル中、早く寝ろよ、部屋から出て行け」
跳ね起きて康子の襟首をつかみ突き飛ばす。康子は腰を打ち、失禁して畳に滴った。

「汚い、近くに来るな」
怒鳴りながらまた突いたので康子の身体は吹っ飛び、後ろ向きに倒れる。鼻血が流れて鉄の味が喉に流れ込む。口の中も切れて痛みが走る。叩き返そうとして手が空を切った。逆に拓哉が無表情のまま襲ってくる。執拗に叩かれる。しゃがみこみ手を上げて頭をかばう。血と涙の混じったものが、目から顎にまでだらだらと滴り落ちる。拓哉に向かって叫ぶが、殴りやめない。
「人殺し、殴るのなら殴りなさいよ、私の子なんだから、殺されても本望よ」
不意に拓哉の顔に血の気が戻り、くしゃくしゃにゆがんでいった。身体全体から雄たけびをあげる。
「お母さん一人では生きていけないのか、僕がいなくなったら生きていけないのか。殺さないといけないの、僕を殺人犯にさせないでくれ」
泣きながら身体を蹴った。幼い頃の顔だった。康子もわめくと、拓哉に肩をつかまれ激しく揺すられた。
「お母さんが死んだらどうする、一緒に死のうか」
「死にたいなら、僕も死んでもいいよ」
食器棚の引き出しに入れていた睡眠薬を二人で飲んだ。さようなら、誰にともなく別れを告げる。眠りに引き込まれそうになった瞬間、『臆病者、また逃げ出すのか』と心が叫ぶ。
這ってトイレにいき指を喉の奥に突っ込んで吐いた。
「拓哉！」蒲団に馬乗りになり揺り動かす。
「眠いから寝させてよ」
意外にしっかりと返事をした。でも眠らせはいけない。肩を組んで歩き始めた。目を覚まそうと歌を口ずさむ。

契約は歩いてこない、
だから歩いていくんだね。
一日一つ、三日で三つ、
成約決めては、また進む

会社の余興で歌った『三百六十五歩のマーチ』の替え歌がなぜか口から出た。本当の歌詞は『幸せ』だ。『幸せ』という言葉が頭から離れない。目の前に赤みがかった光が射して、横顔がくっきりと目にはいる。懐かしい肌の匂いを感じる。そうか、拓哉は彼とそっくりだ。この子の命を握り締めて生きてきたのだ。命を手放すことなどできない。
夕方、這うようにして病院に行くと、康子は鬱病と診断され、薬が処方された。
一月半ば、拓哉は試験日を迎え、数週間して不合格通知を受け取った。二月には次の試験日がきて受験してきた。いつの間にか卒業式も過ぎ去った。
三月、郵便受けに厚い封筒がある。拓哉の受けた大学名が印刷されていた。すべった時は葉書一枚だ。これはきっと！思うより先に飛び上がり部屋に駆け戻る。拓哉は怪訝な顔で封筒を受け取った。
「お母さん僕、通ったみたい」
その途端に抱きついていた。拓哉は突き飛ばすようにして康子から身を引き剥がした。背けた表情が暗かった。
どうしても仕事に復帰しないといけな

い。桜井に連絡がつかなかったので、会社に電話する。支社長が話を聞いてくれることになった。空白だったカレンダーに入学式、面接と書き込む。拓哉は働くことを反対した。

「大丈夫、お母さんは元気になったのよ」

面接日、いつもより多い目に精神安定剤を飲んだ。

「行ってらっしゃい」

拓哉が力のない声で康子を送り出した。入学したというのに浮かぬ顔だ。最近はむしろ沈んでいる。駅に向かって歩き出してから、いつもの銀のネックレスをつけてこなかったことを思い出した。なくても大丈夫、言い聞かせるが気になる。ネックレスは気持ちを支えてくれる。駅に着いたが、取りに帰ることにした。安定剤も、もう一錠飲んでおきたい。

自宅のドアのインターホンを鳴らした。返事がない。不安に駆られ、バッグの中の鍵でドアを開ける。たたきに拓哉の靴がある。だが拓哉の姿が見えない。ヒールを脱ぎ捨てて部屋のふすまを開けた。そこに拓哉はいた。机の付属の棚に結んだ紐を首に巻きつけていた。両膝を付いて、両手をだらりと左右にたらして倒れかかっている。目をつぶり、笑みを浮かべて。康子は飛びついて、拓哉の身体を支えた。身体は温かい。

ビニールの荷造り用の紐は引っ張っても切れない。キッチンの料理バサミを取ってきて、首に巻きついている紐を切った。血の気のない息子の唇に息を吹き込む。必死でいるのに、甘美な恍惚と背徳の香りもかすかに感じた。

絶対に死なせてはいけない、産んで育てた命なのだ。覚えた救命法のままに、拓哉の胸に体重をかけて何度も押す。心臓が跳ね上がり強く脈動した。携帯から救急車を呼ぶ。救急車の音が聞こえてくるまで、膝に抱え震えていた。拓哉の両目がカッと開いた。目の玉がぎょろぎょろと動く。意識は無いようで、覗き込む康子の姿を視線が素通りしていく。

『私立にしか行けませんでした。すみません。大学に行きません。お母さんの足手まといになりたくありません、自由に生きてください』と彼の机の上に何度も重ね書きしたマジックの太い字があった。

拓哉はしばらく入院した。保険が初めて役に立った。退院すると、拓哉は同居したくないと言った。

康子は銀のネックレスを化粧台の引き出しから出して見せた。食器棚から白磁の皿も取り出して見せる。

「これはあなたのお父さんのデザインよ。デザイナーとして優秀な人だわ。デパートにも置いてあるから、お父さんが誰だか分かると思う。お母さんは、お父さんの奥さんを苦しめるのも嫌だったの。でも好きなら逃げ出してはいけなかったのね。お母さんはお父さんと会えたのを良かったと思っている」

あの恋が未熟であったにせよ、失敗ではなかったと思えたのは最近のことなのだ。拓哉はネックレスと、皿を手に取ったが、それほど関心を示さずすぐに返す。

「お父さんのことはどうでもいいよ。お母さんは僕を言い訳にしないで生きて」

康子はうなずいて、探るように拓哉を見つめる。

康子は仕事に復帰した。新人と同じ扱いで毎日飛び込み営業をしている。八百軒戸別訪問して、一軒契約ができるかどうかだった。

拓哉はアルバイトをしながら大学に通っている。友人と携帯で話している様子を見ると、普通の学生生活を送っているようだ。月に一回は医師の元に通い、カウンセリングと投薬を受けている。鬱病の薬を飲み続けているのは康子も同様だ。

桜井が三男に殺されるという事件が発生した。ニュースはＮＨＫで放映されただけ。哀れではあるが珍しいことではないのだ。あの晩の康子と拓哉の間にも起きたことだ。たまたま殺しあわなかっただけで、代わりに桜井たちが殺しあったような気がする。

暗い道を、康子は速足で歩いていた。遠くからどよめきともつかない人の声の波動が伝わってくる。目前に炎が燃え上がり、周囲が赤々と照らされた。炎はゆらゆらと高くなり、低くなり、オレンジにも、紅蓮にも、暗赤色にも変化する。

「ああ赤ん坊が燃えていく」

赤ん坊が炎になめられ、姿を消しつつある。燃えているのは赤ん坊の頃の拓哉だ。彼のおもちゃ類が投げ込まれていく。レゴブロック、絵本、康子は楽しくなってきて、拓哉の大切にしているゴジラとウルトラマンの人形を、炎に投げ込んだ。火の祭り。炎の祭り。周囲に賛美と祝福の声明が一斉に響き渡る。康子の膝の上に火柱が投げられる。受け止めると熱くて飛び上がるが、柱はむくむくと人の形になり、「ああ、拓哉」康子は抱く。くるりと先の丸まった毛先を、片方の指にからめて愛撫する。細い顎に薄い肩、筋肉の感じられない胸、へこんだ平らな腹、その下の清潔な男性器。拓哉のようでもあり、彼の父の若い日々の姿のようでもあり、どちらなのかといぶかしく思いながらも、康子はただ愛しかった。唇を押し当てて、きめ細かいもちの肌のような性器を口に含み愛撫し続けると、一角獣の角が伸びてくる。それを体の奥に沈めると、貫かれたまま身体がさらさらと水になっていく。水面が揺れ、大海の永遠の広がりに繋がっていく。拓哉なのか彼なのかも分からない者と康子は揺れ動き、陶然と海の波の中に溶けて入っていく。太陽が沈みかかっている。空も海も一面に照り映えて燃え上がる。世界は紅蓮の祝祭だ。カーンと高い澄んだ音が大気を震わしていく。

目が覚めた。心地よい解放感が、康子を満たしていた。

ベランダの端に置いた鉢にソメイヨシノの花が三輪ほど灯明のように咲いていた。確か昨年の秋頃、近所で桜の剪定が行われていて、植木職人にもらったずんぐりと太い枝を、何気なく土の残る鉢に刺して、忘れてしまっていた。年寄った枝は、幹も根もないのに、懸命に最後の力を使って花を咲かせたのだ。

ねじれて、根さえなくても。康子は白い花びらを感嘆しながら見つめ続けた。

（抄　神盛敬一）